

## あとがき

このたび跡見学園短期大学のお計らいによって拙訳の『ローマ、ナポリ、フィレンツェ』が陽の目を見ることになった。はじめに、跡見学園短期大学とその学術委員会（委員長福田真一教授）に対し、深く感謝の意を表わしたい。

このスタンダールの著書の翻訳にとりかかったのはもう一昔前のことになる。某出版社の叢書の一巻として刊行するためであった。渡欧をあいだにはさんで、中野のアパートの四階の小部屋、信濃追分の民宿の部屋と原稿用紙をもち歩いて仕事を続けた。こうして、二年あまりも原書をにらみ、訳文をこねまわしていたろうか。やっと出版社に原稿を渡し、その数ヶ月後に校正刷が出はじめた。折からプレイヤード版のスタンダール『イタリア紀行文集』が出たので、この新版を参照しながら初校の校正をおこなった。ところが、出版社の方が突然経営不振に陥り、しかも内部で紛争が起こり、すべてが止ってしまった。編集部的主要なメンバーがやめていき、会社は立ちなおれないように思えた。わたしは、翻訳の出版の目的が立ちそうにないのを確認

すると、とにかく原稿や校正刷を返してもらうことに努めて、訳稿だけは何とかとり戻した。しかし解説や関連地図などの原稿は失くされてしまい、手元に戻らなかった。

その後、わたしはいずれの時期にという思いで、しばらくは訳文に手を入れたりしていたが、これのみにかかずらっているわけにもいかず、結局引出しのなかに放置することになった。しかし『ローマ、ナポリ……』は頭を離れることがなかった。一九八三年のスタンダール生誕二百年を目前にして、今回、そうした原稿の存在を学術委員長にお話したところ、委員会でお諮りくださり、このような立派な形で刊行していただけることとなった。今から見ると訳文には不満な部分があるが、手なおしは最少限にとどめ、ほとんどそのまま出すことにした。解説はとりにいそぎあらたに執筆した。

最後になったが、翻訳に際してお世話になった方々にお礼を申しあげたい。とりわけ、十年前、出版社にわたしを薦めてこの作品を翻訳する機会を与えて下さった杉野女子大学教授佐々木孝次氏、翻訳を応援して下さい、数々のご教示をいただいた早稲田大学教授平岡篤頼氏とイタリア文学者米川良夫氏には衷心より感謝申し上げます。

一九八二年早春